

## 高等学校における柔道授業に関する研究

生田祐介<sup>1)</sup> 村松常司<sup>2)</sup> 森勇示<sup>2)</sup> 金子修己<sup>3)</sup> 金子恵一<sup>4)</sup> 大河内信之<sup>5)</sup>

1) 愛知県立津島北高等学校 2) 愛知教育大学保健体育講座 3) 中部大学健康科学講座

4) 名城大学附属高等学校 5) 愛知県立西尾高等学校

## A Study on Judo Classes for High School Students

Yusuke IKUTA<sup>1)</sup>, Tsuneji MURAMATSU<sup>2)</sup>, Yuji MORI<sup>2)</sup>, Osami KANEKO<sup>3)</sup>,  
Keiichi KANEKO<sup>4)</sup> and Nobuyuki OHKOUCHI<sup>5)</sup>

1) Tsushima-kita High School, Tsushima

2) Aichi University of Education, Department of Health and Physical Education, Kariya

3) Chubu University, Department of Health Science, Kasugai

4) Meijo University Senior High School, Nagoya

5) Nishio High School, Nishio

### I. はじめに

高等学校における柔道授業の現状を調査した先行研究<sup>1)</sup>によると、柔道の授業において柔道を経験した生徒で「以前より興味が出た」と答えた生徒は34.7%だった。また、授業内容が「授業の楽しさ」にどのような影響を及ぼしているのかを比較してみたところ、柔道授業が楽しくないとした生徒は「受身ばかりだった」「同じことを繰り返していた」の回答が多く、「試合をたくさんやった」「疑問に答えてもらえた」「ルールを教えてもらった」「礼儀を重視していた」「道場は清潔にするように指導された」「相手への思いやり」「審判をやった」「心の安定方法を学んだ」の回答が少ないことがわかった。受身ばかりを繰り返すような授業ではなく、効果的に受身を習得させ実際に組み合って攻防することや用具を清潔にさせることも大きな役割を持っていることが示された。さらに、柔道の授業を受けたことのない生徒は柔道にある程度良いイメージを持っているのに関わらず、授業を受けた生徒の中には柔道のイメージが悪くなった者もみられ、柔道の授業法を見直す必要性が示唆された。

本研究では、高等学校で行われた単元柔道の授業を取り上げ、授業を受けた生徒によるアンケート調査を通して柔道のイメージの変化を明らかにするとともに、その要因をつきとめるために柔道授業の分析を行った。

### II. 調査方法

#### (1) 調査対象

調査対象は愛知県三河地区の高等学校に在籍する1年生の保健体育授業「柔道」を受講した男子39名である。授業を担当したのは柔道部の顧問であり、柔道6段の教師歴21年44歳の教師である。

#### (2) 調査時期

柔道授業は4月25日～6月25日までの間に20単位時間が行われた。アンケート調査は初回授業と最終回授業で行った。

#### (3) 調査方法

調査は授業分析とアンケート調査によって行った。授業分析のためにすべての授業をビデオに録画し、大きく内容の変化する6回を分析に用いた。アンケート調査は初回授業と最終回授業の計2回行った。

#### (4) 分析方法

### 1) 授業分析

授業分析は以下のことを調査した。

- ① 教師発言分析1…カテゴリー（技術，ルール，文化・思想，礼，体力，マネージメント・その他）
- ② 教師発言分析2…カテゴリー（説明，肯定的発言，矯正の発言，否定的発言，発問，その他）
- ③ 生徒の活動時間分析…カテゴリー（文化：日本文化・柔道文化・礼法について，技術：柔道の技術，立技・寝技・補強運動等，ルール：ルールの学習，審判法の学習等，受身：受身の練習，試合：試合参加，試合観戦等，その他：マネージメント，アンケート，テスト，準備体操等）

注…マネージメントとは授業を組織すること，活動を変えること，用具やその配置に対する指示，授業での常規的活動に注意を払うこと，等々の目的に向けて表現される言語的，非言語的な教師行動をさす<sup>2)</sup>。

### 2) アンケート調査分析

各質問に対する回答を，そう思う4点，思わない0点の5段階（4-3-2-1-0点）で得点化した。授業前後に同様の質問をした各質問項目の回答は2群間の平均値の差を比較するためにt検定（有意水準は5%）を採用した。また，授業前・授業後に単独で行われた質問の回答は同様の質問群の平均値を検定値に用い，1サンプルのt検定（有意水準5%）を用いた。

## Ⅲ. 結 果

### (1) 授業分析

#### 1) 本単元の内容

今回の授業での生徒の学習の過程を表1に示した。授業は受身学習と平行して，寝技学習を中心として行われている（2～8時間目）。受身が習得できると立技の学習を行い（9～13時間目），最終的に団体戦による寝技試合と審判ができる（14～19時間目）ように構成されている。

#### 2) 生徒の学習活動時間分析

今回の授業の中で生徒がどのような学習活動にどれだけの時間を費やしているかを確認した。結

果を表2に示した。

### 3) 教師発言分析1（表3）

教師の発言をどのような効果を求めたものかを「説明」「肯定的発言」「矯正の発言」「否定的発言」「発問」「その他」に分けた。分類は著者と協力者（同大学院，24歳，高等学校保健体育非常勤講師）がそれぞれ行い，一致率は73.4%だった。この分析は柔道授業の分析としてではなく体育授業の分析として分類するカテゴリーである。このことから著者と協力者の分類が異なる場合でも授業とは関係のない発言とすることはできない。よって不一致のものは破棄せず協議し一致させた。授業が進むごとに説明に関する発言が減り，肯定的な発言が増えている。

### 4) 教師発言分析2（表4）

教師が授業中にした発言を内容別に「技術」「ルール」「文化・思想」「礼」「体力」に関することに分け，マネージメントに関することやどれにも該当しないものは「その他」にし発言数を分析した。また，両者の内容が一致しなかったものは筆者の定めた柔道授業のカテゴリーに一致しなかったとして破棄した。

1時間目の授業では柔道の文化や礼についての学習内容の発言が主に行われた。3～9時間目までは技術内容に関する発言が多い。14時間目は柔道のルールに関する発言が多くなされている。18時間目では試合中心の授業でルールに関する発言が多い。20時間目は柔道の内容は少なくマネージメント等の発言が多い。

### (2) アンケート調査分析

#### 1) 授業前調査

##### ①これまでの柔道経験

今までに柔道をやった経験があるか授業を受講する生徒に質問したところ，経験者と未経験者の人数は同数19名で無回答者が1名いた。

##### ②柔道授業への期待（表5）

生徒が柔道授業に対して何を期待しているかを質問した。検定値は期待得点8問の平均値を検定値として用い，1サンプルによるt検定を行った。「柔道の歴史が知りたい」以外の質問の回答は中央値=2より高く，柔道授業への期待は高いと言える。なかでも「体力をつけたい」「立ち技を知

表1. 生徒の主な学習内容

時間	1 時間目	2～8 時間目	9～13 時間目	14～19 時間目	20 時間目
学習内容	挨拶 基本技能 アンケート 準備体操 補強運動 礼法 挨拶	準備 挨拶 安全確認 準備体操 補強運動 受身練習 寝技練習 約束練習 試合練習 整理体操 挨拶	準備 挨拶 安全確認 準備体操 補強運動 受身練習 立技練習 約束練習 投げ込み練習 挨拶	準備 挨拶 安全確認 準備運動 補強運動 ルール 審判法 寝技練習 試合練習 体操 挨拶	準備 挨拶 準備体操 補強運動 受身練習 試合(寝技) テスト アンケート 総評 挨拶

表2. 生徒の学習活動時間分析

時間目	文化	技術	ルール	受身	試合	その他	合計
1	0:25:28	0:03:30	0:00:00	0:00:00	0:00:00	0:16:48	0:45:46
3	0:00:33	0:17:04	0:00:15	0:20:12	0:04:45	0:08:23	0:51:12
9	0:00:16	0:33:22	0:00:00	0:02:05	0:00:00	0:15:28	0:51:11
14	0:00:14	0:07:08	0:24:20	0:00:00	0:10:20	0:06:46	0:48:48
18	0:00:14	0:02:19	0:00:16	0:01:23	0:33:20	0:14:09	0:51:41
20	0:00:42	0:05:14	0:00:00	0:01:34	0:17:06	0:29:02	0:53:38

単位 h:m:s

表3. 協議後の効果別教師発言

カテゴリー	1 時間目	3 時間目	9 時間目	14 時間目	18 時間目	20 時間目
	%	%	%	%	%	%
説 明	51.8	50.7	48.0	49.5	34.5	28.2
肯 定	1.4	3.1	5.0	6.1	6.9	8.1
矯 正	6.6	2.8	1.9	2.4	8.3	5.6
否 定	2.2	5.6	2.5	2.4	1.4	1.6
発 問	8.8	4.2	6.0	7.5	7.6	1.6
その他	29.2	33.6	36.7	32.1	41.4	54.8
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表4. 内容別教師発言頻度

カテゴリー	1 時間目	3 時間目	9 時間目	14 時間目	18 時間目	20 時間目
	%	%	%	%	%	%
技 術	0.0	54.0	41.9	0.0	4.2	0.0
ル ー ル	0.0	0.0	0.0	63.6	12.5	0.0
文化・思想	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
礼	11.7	0.9	0.7	3.9	1.7	4.9
体 力	3.7	4.0	7.7	5.7	9.2	13.7
その他	74.6	41.1	49.6	26.8	72.5	81.4
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表5. 柔道授業への期待得点

授業への期待	N	平均点	標準偏差	t検定
体力をつけたい	39	3.18	1.00	p<0.01
立ち技を知りたい		2.87	1.13	p<0.05
授業を通して友達を作りたい		2.72	1.12	N.S
ルールを知りたい		2.62	1.11	N.S
寝技を知りたい		2.48	1.07	N.S
礼儀を学びたい		2.36	1.22	N.S
柔道授業を受けるのが楽しみである		2.15	1.16	N.S
柔道の歴史を知りたい		1.18	1.17	p<0.01

検定値＝2.445(期待得点 8 問の平均点)

表6. 授業前後の柔道イメージ比較

柔道イメージ	N	授業前		授業後		t 検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
心身の鍛錬に効果がある ↑	39	3.36	0.93	3.67	0.53	p<0.01
体力が向上する ↑		2.67	1.20	3.23	0.93	p<0.01
体格による優位差がある		3.56	0.97	3.21	1.08	N.S
痛 い ↓		3.56	0.82	3.13	1.06	p<0.05
日本の文化を感じる		3.18	0.97	3.10	1.17	N.S
運動量が多い ↑		2.51	1.14	3.03	1.04	p<0.05
おもしろさがある ↑		1.82	1.12	3.00	0.83	p<0.01
ケガが多い		3.23	0.93	2.97	0.93	N.S
くさい		2.62	1.21	2.56	1.10	N.S
汚 い		2.38	1.25	2.15	1.14	N.S

表7. 授業前後の柔道の及ぼす影響

柔道の及ぼす影響	N	授業前		授業後		t 検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
礼儀正しさの養成に役立つ	39	3.62	0.81	3.74	0.55	N.S
柔軟性の発達に役立つ		3.10	1.10	3.44	0.94	N.S
規則を守る態度の養成に役立つ		3.41	0.88	3.38	0.78	N.S
根気強さの養成に役立つ		3.44	0.72	3.33	0.90	N.S
筋力の発達に役立つ ↑		2.97	1.01	3.28	0.89	p<0.05
敏捷性の発達に役立つ ↑		2.62	1.29	3.21	0.89	p<0.01
積極性の向上に役立つ ↑		2.72	1.12	3.18	0.94	p<0.05
瞬発力の発達に役立つ		2.74	1.29	3.05	1.00	N.S
情緒の安定に役立つ		2.54	1.19	2.69	1.20	N.S
持久力の発達に役立つ		2.38	1.18	2.67	1.13	N.S
自主性の向上に役立つ		2.41	1.16	2.67	1.18	N.S
調整力の発達に役立つ		2.41	1.16	2.62	0.99	N.S
責任感の向上に役立つ ↑		1.64	1.25	2.33	1.20	p<0.01
決断力の向上に役立つ ↑		1.87	1.38	2.28	1.15	p<0.05
協調性の向上に役立つ ↑		1.59	1.07	2.15	1.01	p<0.01
忍耐力の向上に役立つ ↓		3.05	1.00	1.87	0.86	p<0.01

表8. 授業前後の影響得点の変化

影響得点	N	授業前		授業後		t 検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
心得点	39	22.36	5.16	26.28	5.98	p<0.05
体得点		16.23	4.98	18.26	4.23	p<0.01
総得点		38.59	6.19	44.54	8.08	p<0.01

表9. 授業前後における柔道の知識興味の変化

柔道の知識興味	N	授業前		授業後		t 検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
柔道の歴史を知っていますか	39	0.59	0.94	1.62	1.16	p<0.01
ルールを知っていますか		1.54	1.35	2.92	0.96	p<0.01
テレビで中継されているのを見ますか		1.33	1.26	1.54	1.12	N.S

表10. 授業後の授業評価

授業評価	N	平均値	標準偏差	t 検定
教師は十分な知識を持っていましたか	39	3.97	0.16	p<0.01
教師は十分に準備し熱意を持っていましたか		3.95	0.22	p<0.01
この授業期間を通じて常に出席しようと心がけた		3.64	0.84	p<0.05
総合的に見て良い授業でしたか		3.62	0.54	p<0.01
柔道の授業は楽しく過ごせましたか		3.56	0.60	p<0.05
柔道の授業のクラスは活動しやすい仲間でしたか		3.56	0.82	N.S
壁の資料は理解を助けてましたか		3.36	0.87	N.S
柔道の基本的な技術が習得できた		3.36	0.74	N.S
運動量は十分に確保されていましたか		3.33	0.77	N.S
学ぶことを具体的に考えて授業に参加していましたか		3.10	0.88	N.S
柔道の授業をもっと続けてやりたいですか		3.03	0.78	p<0.05
授業の時間配分は適切でしたか		2.92	0.90	p<0.01
理論と実技を関連づけて学習できましたか		2.79	0.99	p<0.01
柔道の授業はつぎも同じクラスがいいですか		2.31	1.36	p<0.01

検定値=3.32(授業評価得点 14 問の平均値)

りたい」は特に高い（8問の平均値=2.445より有意に高い）。

## 2) 授業前後の比較

### ①柔道のイメージ（表6）

授業前は「体格による優位差がある」「痛い」「心身の鍛練に効果がある」の順に平均値が高く、「おもしろさがある」の平均値が低かった。授業後は「心身の鍛練に効果がある」「体力が向上する」の順に平均値が高く、「汚い」の平均値が低かった。授業前後の「心身の鍛練に効果がある」「体力が向上する」「運動量が多い」「おもしろさがある」の平均値は上がり有意な変化がみられた。

「痛い」の平均値は下がり有意な変化がみられた。

### ②柔道の及ぼす影響（表7）

授業前は「礼儀正しさの養成に役立つ」「根気強さの養成に役立つ」「規則を守る態度の養成に役立つ」の順に平均値が高く、「協調性の向上に役立つ」の平均値が低かった。授業後は「礼儀正しさの養成に役立つ」「柔軟性の発達に役立つ」「規則を守る態度の養成に役立つ」の順に平均値が高く、「忍耐力の向上に役立つ」の平均値が低かった。授業後では「筋力の発達に役立つ」「敏捷性の発達に役立つ」「積極性の向上に役立つ」「責任感の向上に役立つ」「協調性の向上に役立つ」

の平均値は上がり有意な変化がみられた。「忍耐力の向上に役立つ」の平均値は下がり有意な変化がみられた。

柔道が及ぼす影響について心に関する10項目、体に関する6項目の計16項目について質問した。得点化し集計したものを心に関することを心得点、体に関することを体得点、あわせたものを総得点として集計して統計に用いた(表8)。

授業後での影響得点は「心得点」「体得点」「総得点」のすべて平均値は上がり有意な変化がみられた。

### ③柔道の知識・興味(表9)

授業前は柔道の歴史・ルール

の知識はあまり無かったが、授業後の「柔道の歴史を知っていますか」「ルールを知っていますか」の平均値は上がり有意な変化がみられた。「テレビで中継されているのを見ますか」の質問では授業前後で有意な変化はみられなかった。

### 3) 授業後調査

#### ①柔道授業の感想

柔道授業を受けて柔道をどのように思ったかを質問したところすべての生徒が柔道の授業が楽しかったと答えた。また、89.7%の生徒が柔道を好きになったと答え、89.7%の生徒が柔道をやるのが楽しくなった、92.3%の生徒が柔道を見ることが楽しくなったと答えた。

#### ②授業評価(表10)

柔道の授業を受けて感じたこと14問を質問した。質問内容は「①教材に対する満足、②学級内相互作用に対する満足、③個々の学習目標自己設定、④態度、⑤教師に対する満足、⑥方法、⑦技術習得、⑧総合」である。検定値には授業評価得点14問の平均値を用いてt検定を行った。

質問の回答は中央値=2より高く、柔道授業への評価は高いと言える。なかでも「教師は十分な知識を持っていましたか」「教師は十分に準備し熱意を持っていましたか」「この授業期間を通じ

表11. 柔道授業後の授業理解

授業理解	N	平均値	標準偏差	t検定
試合の面白さがわかった	39	3.62	0.54	p<0.01
寝技ができるようになった		3.62	0.59	p<0.01
受身ができるようになった		3.49	0.72	p<0.01
自分は授業に積極的に参加した		3.49	0.79	p<0.01
畳の掃除の仕方がわかった		3.46	0.76	p<0.01
柔道のルールがわかった		3.44	0.50	p<0.01
礼儀の大切さがわかった		3.44	0.64	p<0.01
柔道の授業が好きになった		3.33	0.74	N.S
相手を思いやることができた		2.92	0.98	N.S
公正な態度が身についた		2.87	0.89	N.S
立ち技ができるようになった		2.74	0.97	p<0.05
気持ちを安定できるようになった		2.69	0.98	p<0.01
筋力がついた		2.54	1.10	p<0.01
柔道の歴史がわかった		2.46	1.10	p<0.01
健康になった		2.36	1.16	p<0.01

て常に出席しようと心がけた」「総合的にみて良い授業でしたか」「柔道の授業は楽しく過ごせましたか」は特に高い(14問の平均値=3.32より有意に高い)。

#### ③授業でのケガ

授業の中でケガをしたかを質問したところ、ケガをしたと答えた生徒は25.6%であった。ケガの内容では10名中6名が擦り傷で、それ以外は捻挫であった。大きなケガはなかった。

#### ④授業理解(表11)

柔道の授業を受けて理解したこと、身についたこと15問を質問した。検定値には授業理解得点15問の平均値を用いてt検定を行った。

質問の回答はすべて中央値=2より高く、授業理解は高いと言える。なかでも「試合の面白さがわかった」「寝技ができるようになった」「受身ができるようになった」「自分は授業に積極的に参加した」「畳の掃除の仕方がわかった」「柔道のルールがわかった」「礼儀の大切さがわかった」は特に高い(15問の平均値=3.10より有意に高い)。

#### ⑤柔道授業へのカラー柔道衣の導入

先生に柔道授業20回の中で、出来る限りカラー柔道衣と普通の柔道衣を同じ割合で着用してもらえように依頼した。そして生徒にカラー柔道衣

をどのように感じるかを質問した。

教えてもらう時に受と取の動きが見やすかったと、23名(59.0%)の生徒が答え、先生がカラー柔道衣を着ていることに抵抗がないと答えた生徒は38名(97.4%)だった。また、先生がカラー柔道衣を着ることに賛成と答えた生徒は23名(59.0%)、どちらでもいい16名(41%)だった。

#### Ⅳ. 考 察

##### (1) 授業分析

本単元は、一年生であることから最終的に寝技による団体戦を行うことができるように構成されていた。その授業の流れは、受身と平行して寝技学習や寝技の試合練習を行い、受身が習得できると立技学習に移行している。授業に限らず柔道の指導においての最大のポイントは受身指導であると考えられる。このことは先行研究<sup>1)</sup>で、柔道の授業が面白くなかったとした生徒の多くが「受身ばかりで柔道ではなかった」としていることからいえる。柔道の「組み合う中で投げたり投げられたり」というイメージを持って柔道授業を受ける生徒にとって、ただ量をたく受身練習は苦痛なものであるだろう。受身ができなければ柔道はできないという考え方を捨てて、本単元のように受身練習と平行して寝技を取り入れることや、技と関連を持たせて受身練習をさせる等、教師が授業の中でいろいろな方法を試みるのが大切である。このことは、柔道指導の手引き(改訂版)の、練習法と試合の章では「柔道の学習活動では、生徒の体力や技の習得の程度に応じた適切な練習や試合の仕方を工夫し指導することが、学習効果を高めるとともに、安全を確保するうえからも極めて大切なことといえる」<sup>3)</sup>と示されている。また、指導計画と学習指導の章では「高等学校学習指導要領は武道の技能や態度の内容を抽象的に示しているのみで、柔道についての具体的な内容は示していない。したがって、各学校において学習内容を定める必要がある」<sup>4)</sup>と示されている。

生徒の学習活動時間分析からみる内容の流れとしては、文化的なことから受身や技術的な内容へ移行し、最後には試合が主となる内容になっている。本分析で取り上げたそれぞれの時間において

教師が生徒の学習段階に応じた目的を持って指導していたかは授業分析からいうことはできない。しかし、ひとつひとつ授業の中で特徴を持って展開されていることは事実である。本単元中に生徒が受身学習に終始した時間はなく、文化、ルール、試合に関する学習時間も配分されている。これらのことより本単元は受身、寝技、立技、補強運動、ルール、礼法などを生徒の学習段階に応じ、バランスよく配分してあるといえる。

本単元における効果別の教師発言分析から、授業が進むごとに説明に関する発言が減り(1時間目51.8%→20時間目28.2%)、肯定的な発言が増えた(1時間目1.4%→20時間目8.1%)。肯定的・矯正・否定的な発言は生徒へのフィードバックとしての効果を持っている。シーデントップ<sup>5)</sup>によると、「体育の学習指導では、もっぱら矯正のフィードバックが与えられる傾向が強い。技術的な試みに対する否定的なフィードバックはほとんど見られない。これらのことから矯正のフィードバックと肯定的フィードバックのバランスを強調したい」としている。今回の分析では、6単位時間中の4単位時間で肯定的発言数が矯正の発言より多く、全時間を通して否定的発言が少ないことから良い雰囲気で行われていると言える。

さらにシーデントップ<sup>5)</sup>は、「発問は教師の言語的方法の中で最も重要なものの一つであるとしている。発問はそこに含まれる認識的活動に応じて、異なった目的に対して適用される」としている。本分析では発問の目的までは明らかにはできないが、授業の中で発問という授業方法は定期的に用いられていることがわかる。

柔道の内容別教師発言分析から、各時間の教師の指導内容を推測することができる。すべての時間を通して、指示などのマネジメントやその他のカテゴリーにあてはまる項目が多かった。これは教師主導の一斉授業によって展開されたためであると考えられる。発言内容を具体的にみると、初回の授業では礼法や文化に関する発言が多くなされている。その後は技術に関する発言が多くを占め、試合期に入るとルールに関する発言が多く、礼法に関する発言もされている。このことからまず初歩の段階で柔道の文化にふれさせ、技術指導

へ移っていったことが窺える。試合期では試合進行をする上でルールが重要であることや、相手を思いやる礼法が重視されることが推測される。これは高等学校学習指導要領解説の武道「態度の内容」<sup>6)</sup>のなかに「伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重し、練習や試合ができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度がとれるようにする。また、禁じ手を用いないなど安全に留意して練習や試合ができるようにする。」と指摘されていることと一致している。

## (2) アンケート調査

### 1) 業前調査

調査対象となる生徒の柔道経験は、経験者と未経験者は各19名であった。高等学校における柔道授業は、今回のように中学校の授業で柔道の授業を受けた生徒と受けてない生徒のいる中で行われることが多い。柔道に初めてふれる生徒と柔道を経験している生徒の混在する中で、柔道衣の着方や受身など基本動作をいかに指導するかが両者に授業を厭きさせないためには必要である。

尾形<sup>7)</sup>は、中学生を対象とした柔道に関する意識調査を行い、「柔道をやってみたいと答えた者は「自己防衛に最もよいから」「腕力がほしいから」といった護身術としての効果の項目、「強い身体を持ち主になりたいから」「健康になりたいから」といった身体面に及ぼす効果の項目に関してそれぞれ高い回答率を示す傾向にある」を理由として挙げている。今回の調査でも柔道授業への期待で最も多かったものは「体力をつけたい」であった。「授業を通して友達を作りたい」という期待が大きいことは、一年生の春の授業なのということから窺える。

### 2) 柔道授業前後の比較

授業前の柔道のイメージは「体格による優位差がある」「痛い」が多くみられ、先行研究<sup>1)</sup>の柔道経験の無い生徒と同様であった。村松<sup>8)</sup>も「柔道を学習する際の最大の壁は『痛さ』『怖さ』であり、安全で効果的な練習のしかたを工夫したりすることが大切である」としている。先行研究<sup>1)</sup>では、柔道経験後の方が「体格による優位差がある」と答えた生徒が多かった。今回の調査では、授業後の方が体格による優位差を感じておらず、

「痛い」というイメージも授業を受けることで小さくなった。注目すべきは授業後に「おもしろさがある」「体力が向上する」が高くなっていることから、この授業を受けたことで柔道はおもしろいというイメージが大きくなり、また、柔道授業に期待していた「体力をつけたい」という項目も達成しているといえる。このことを授業分析に要因を求めると、すべての授業で体力に関する発言をしていることから、授業の中で体力の向上に関する内容があったことが示されている。

本単元20時間を受けたことで、多くの生徒が、柔道は体力・精神面ともによい影響を与えると考えるようになったことがわかる。このことは、小森<sup>9)</sup>の柔道授業後の意識調査でも柔道の授業で精神面・体力面が向上すると考えている生徒が8割を越えており、同じような結果が得られている。しかし、先行研究<sup>1)</sup>では柔道経験者と未経験者では、経験者の方が柔道の及ぼす良い影響は少ないとしている。これらのことから柔道の授業を受けたことで柔道に対する良いイメージが形成された今回の授業や小森<sup>9)</sup>の授業は良い授業効果があったといえる。そのような中で精神面の「忍耐力の向上に役立つ」という項目は、授業後の方が柔道による影響は無いと考えるようになった。しかし、これを肯定的に考えると、忍耐とは大辞林によると「苦しみ・つらさ・怒りなどを、たえしのぶこと」を意味しており、柔道の導入段階においては耐えることよりも柔道のおもしろさや喜びを感じさせることが大切であると考えられることができる。杉山<sup>10)</sup>も「能の稽古法と関連させて柔道も最初は楽しいスポーツとして行い、武道としての修練は有段者になったあたりからでよいのではないだろうか」としている。また、本村<sup>11)</sup>は「武道はスポーツの中の運動領域の一つとして位置づけされている。常に古くて新しい問題とされる武道がスポーツかではなく、武道はスポーツとして学校教育の、また学校体育の意義ある運動教材として位置づいてきた。したがって、武道としての特性にふれながら、スポーツとしての楽しさ、喜びを味わう。ここに一つの意義がある」としている。

柔道の授業で柔道のイメージは良くなり、また、心身への良い影響もあると感じるようになって来



ていることから、今回の授業の中で、生徒はまさにスポーツとしての柔道のおもしろさを味わいながら、武道としての精神的価値も感じているのではないと思われる。

今回の授業の前後で生徒は柔道の歴史やルールといった知識についても向上したと感じていることがわかる。授業分析に要因を求めると、授業の中で文化や歴史、ルール学習の時間が十分とられ教師も文化やルールに関する発言をしていることが挙げられる。最終回の授業では、ペーパーテストの中で文化、歴史、ルールに関する問題があり、武道場の壁に柔道に関する資料が張り出されていたことも要因と考えることができる。

### 3) 授業後調査

授業後の調査ですべての生徒が「授業は楽しかった」と答えた。経験者と未経験者が混在する中で本単元は両者に評価されており、このことはすべての生徒にとって非常に有意義な授業であったことの裏付けと考える。また、「柔道をやるのが楽しくなった」と答えた生徒が89.7%、「柔道を見ることが楽しくなった」は92.3%であり、この授業によって柔道への好感度は上がったと考えることができる。しかし、数人であるとはいえ柔道をやることや・見ることに對して否定的な生徒がいたことも事実として受け止めていくべきである。生徒からみた柔道授業の現状を調査した先行研究<sup>1)</sup>では、「柔道経験後の柔道への興味の変化をみると、授業で柔道を経験し、興味が出たと答えた生徒は34.7%であった。授業において重要なことは興味が出るように指導することはもちろんだが、それ以上がっかりさせない授業をやるのが重要である。」と示されているが、柔道授業の行い方によって生徒にとって楽しい授業、柔道に対する興味を持たせる授業を行うことができることが明らかになった。

授業評価では用意された質問のすべてにおいて5段階(0～4)の中央値=2を越えており高い評価が得られている。特に教師に対する満足が高く、教師の知識や熱意が生徒に十分に伝わっていると言える。このことは本単元を担当した教師は柔道が専門であり、柔道に関する文化・歴史・ルールの知識を十分に持っていることが要因として

考えられる。続いて「生徒の授業へ出席しようとする心がけ」が高く、生徒が授業を楽しみにしていたことがわかる。

本単元後の授業理解では「試合のおもしろさがわかった」の得点が最も高かった。本単元の授業分析からわかるように、受身学習と平行して寝技の試合を行い、終盤では審判のいる中で試合練習を行っているなど柔道の試合にふれる機会が多かったことが「試合のおもしろさがわかった」につながったと考えることができる。このことは、「寝技ができるようになった」の得点が高いことの要因でもある。このように生徒学習時間分析と並べてみると、「畳の掃除の仕方がわかった」「柔道のルールがわかった」「礼儀の大切さがわかった」の項目の得点が高く、授業内容の中でも特に理解度が高い。また、すべての項目で中央値=2を越えていることから、本単元を通して柔道を理解することができたと言える。

本単元のなかで教師にできる限りカラー柔道衣と普通の柔道衣を同じ割合で着用してもらえるように依頼した。筆者は教師が柔道授業で技を指導する際にカラー柔道衣を用いることを提案する。元来、カラー柔道衣の導入は見る側に判りやすくすることが目的である。筆者は授業で教師が柔道を教授する時に、生徒からより見やすく理解を助けると考えたからである。二種類の柔道衣を用いた本単元で、「カラー柔道衣の方が見やすい」と答えた生徒は59.0%であり、教師がカラー柔道衣を着ていることへの抵抗はないと97.4%の生徒が答えている。その一方で、「カラー柔道衣は見づらい・抵抗がある」と答えた生徒も一人ではあるが存在していることも事実として受け止めなければならない。しかし、教師がカラー柔道衣を着ることへの賛否を問うたところ、59.0%の生徒が賛成であると答え、反対した生徒はいなかった。カラー柔道衣を柔道授業の中に使用することは、それが国際柔道大会に導入された時と同様に文化的な問題提起されることが予想される。柔道衣がなぜ白であるかという日本文化を生徒に話した上で、生徒によりわかりやすく柔道を指導するための工夫として教師が取り入れていくことが望ましいのではないだろうか。

以上のことから、柔道の経験者と未経験者の混在する高等学校の柔道授業の中で、どのように授業が進められると、それまでの経験に関係なく授業を楽しめるようになるかが示された。柔道授業を対象とした分析方法として、今回は一単元を対象として分析を試みたが、今後は他の教師による授業や他学年の授業など対象を増やすなど知見を増やしていくことや授業形態や分析目的に応じて改良していくなどの課題がある。本研究が今後の学校体育における柔道授業の発展のための手がかりの一つとなることを期待したい。

## V. 要 約

愛知県三河地区の高等学校に在籍する1年生の保健体育授業「柔道」を受講した男子39名を対象として、生徒によるアンケート調査や感想文の分析をすること、柔道のイメージの変化を明らかにするとともに、その要因をつきとめるための柔道授業における授業分析を行った、今回の研究を通して以下のことが明らかになった。

- (1) 生徒の学習活動時間分析から本単元には柔道の知識・技能に関する内容が多く含まれていることがわかった。効果別にみた教師発言からは肯定的発言が矯正的発言より多く、良い雰囲気での授業が行われていると言える。内容別にみた教師発言は学習活動時間と対応する結果が得られた。
- (2) 授業前アンケート調査から生徒は柔道授業に「体力の向上」を期待している。柔道授業後では「痛い」というイメージは低くなり、「おもしろさがある」「体力の向上に役立つ」は高くなった。本単元を受けたことで柔道は体力・精神面ともによい影響を与えると感じるようになった。授業後の調査ですべての生徒が「授業が楽しかった」と答え、授業を高く評価しており、特に教師に対する満足は高い。生徒の授業理解「試合のおもしろさがわかった」が最も高かった。

以上のことから、柔道の経験者と未経験者の混在する高等学校の柔道授業の中で、どのように授業が進められるとそれまでの経験に関係なく授業を楽しめるようになるかが示唆された。柔道授業を対象とした分析方法として、今回は一単元を対象として分析を試みたが、対象を増やすなど知見

を増やしていくことなどの課題がある。本研究が今後の学校体育における柔道授業の発展のための手がかりの一つとなることを期待したい。

## VI. 参考文献及び引用文献

- 1) 生田祐介(2002)：高校生からみた柔道のイメージ, 愛知教育大学大学院保健体育科平成14年度修士論文4-38
- 2) Daryl Siedentop (1990)：体育の教授に関する知見, 体育の教授技術(高橋健夫ほか訳), 大修館書店, 71-88
- 3) 文部省(1992)：学校体育実技指導資料, 柔道指導の手引き(改訂版), 練習法と試合, 102-110
- 4) 文部省(1992)：学校体育実技指導資料, 柔道指導の手引き(改訂版), 指導計画と学習指導, 26-33
- 5) Daryl Siedentop (1990)：学習指導の実践, 体育の教授技術(高橋健夫ほか訳), 大修館書店, 231-266
- 6) 文部省(1999)：F 武道, 各教科, 高等学校学習指導要領解説, 保健体育編, 52-57, 東山書房
- 7) 尾形敬史(1978)：柔道に関する意識の研究(第一報), 中学生を対象として, 武道学研究, 11-2, 32-34
- 8) 村松利之(2001)：柔道の授業, 武道, 新学習指導要領による高等学校体育の授業, 下巻, 216-235, 大修館書店
- 9) 小森章二郎(1997)：柔道授業報告⑥, 高校現場体育授業の現状と課題, 月刊武道, 11月号, 74-79
- 10) 杉山重利(1997)：武道授業の改善, スポーツから入りて武道に到る, 武道の活性化を考える, 月刊武道9月号, 90-93
- 11) 本村清人(1998)：武道指導の意義と目標, II 理論編, 技をみがき試合を楽しむ武道の授業, SPASS中学校体育・スポーツ教育実践講座, 227-230, ニチブン